

## 東京 IPO 特別コラム

---

2017年7月3日 Vol.85

### 百花繚乱のAI関連銘柄

人手不足の解消方法の一つとして注目されている人工知能（AI）への関心が高まっています。まさに時のテーマでもあり、多くの企業がAIを事業に活かそうとしているようです。私たちの活動記録などはデータとなって蓄積され、それを基盤にしたシステムがごく当たり前のように活用される時代となってきました。先週ビッグサイトで開催された第1回AI・人工知能EXPOには多くのビジネス関係者が足を運び、会場はまるでお祭り騒ぎのような賑わいが見られました。そこではAIシステムを展示する企業とそれを活用しようと考えている企業が熱心にやり取りする姿が見られ、初めての展示会なのでまだ比較的小さな展示スペースではありますが、今回は既に大きくスペースを取るとの主催者企業の告知が目につきました。

主な出展企業としてはLINE（3938）やミクシィ（2121）、ソフトバンクグループ（9984）、NTTドコモ（9437）、サイバーエージェント（4751）などの大手企業のほか、日本サードパーティ（2488）、さくらインターネット（3778）など10年ほど前にIPOした伸び盛りの中堅企業の展示ブースもありました。また、ユーザーローカル（3984）、DMソリューションズ（6549）、SHIFT（3697）、ALBERT（3906）などの直近になって上場したベンチャー企業など多くのAI関連の商材やサービスが盛りだくさんに展示され、まさに百花繚乱の様相です。まだまだAIはこれからの分野ですので未来の姿は未知数ではありますが、展示内容によってそれぞれの企業ごとに力の入れ方がわかります。筆者が今回の展示会で目にした中ではチャットボットというコミュニケーションツールの存在が気になりました。マーケティングにAIを活用しようという動きです。

これについては、今回の展示会には出展していませんでしたがバーチャレクスコンサルティング（6193）も注力しているとの話を先日の説明会でお聞きしました。ここもALBERTと同様に株価は低迷したままですが、いずれは見直しの余地がありそうです。このようにAIはマーケティングやゲーム、株の自動売買などにも応用されロボットや自動車などのIoT機器とつながって世の中を変えていく時代が来るに違いありません。AI自体をテーマにしたIT系企業だけではなく既存事業にAIを導入してサービスの高度化や製・商品の販売を行う新たな取り組みが水面下では進んでいるものと推察されます。

今回の展示会では既存の上場企業に交じってまだ聞きなれない有力企業の展示も目につきました。今後、株式市場にもこうした聞きなれない新たなAI関連銘柄が続々とIPOしてくると見られますが投資家の皆さんの楽しみや関心もますます広がってきそうです。

（東京 IPO コラムニスト 松尾範久）